

《新刊紹介》

清水拓野著

『中国伝統芸能の俳優教育——陝西省演劇学校のエスナグラフィ——』

(風響社 二〇二二年三月三四六頁 五〇〇〇円＋税)

今中崇文

今回は、私が博士論文のフィールドに入る際、導き手の人となってくれた研究者による単著が出たので紹介したい。私は、中国西北部にある陝西省の中心都市、西安でイスラームを信仰する少数民族である回族のコミュニティーと宗教儀式についての研究を志し、二〇〇七年から一年間、フィールドワークを行ったが、調査開始時には回族コミュニティー内に知り合いもおらず、どのようにアクセスしようかと悩んでいた。そのとき、陝西地方の伝統演劇を演じる俳優にも回族出身の方々がいるからと仲介の労を執ってくれたのが、本書の著者である清水氏である。氏には、回族出身の役者だけでなく、自らのインフォメーションである行政の幹部職員や市井の研究者など、さまざまな人々を紹介していただき、私のフ

ールドへの理解を深める手助けをもらった。本書は、著者の博士論文を書籍化したものであり、先に挙げた陝西地方の伝統演劇、「秦腔」を取り上げ、その俳優教育について「学校化」をキーワードに解き明かそうとするものである。秦腔は、日本ではほとんど知られていないと思うが、遅くとも明代には存在し、京劇の形成にも影響を与えたといわれる伝統演劇である。陝西省だけでなく、隣接する甘肅省など、中国西北地域で広く愛好されており、幅広い愛好家層を有している。その中心地である西安でもたいへん人気があり、私もフィールドワーク中には、公園などで歌や楽器、振付などの練習をしている「秦腔迷」(秦腔ファン)の姿をよく見か

けたものである。私は未体験であるが、市内にはいくつかの秦腔を鑑賞できる茶館もあるという。京劇と同様、歌やしゃべり、立ち回りによって構成される劇で、「生」と呼ばれる男性役、「旦」という女性役、「淨」という隈取をする男性の役、そして「丑」の道化役という四大役柄がある。その一方で、歌やしゃべりに陝西方言が用いられたり、伴奏する楽器の構成が異なっていたりなどの特徴がある。

とはいえ、伝統演劇の俳優教育と「学校化」という言葉が結びつきにくいと思われる方も多いのではないだろうか。私もなども、中国伝統演劇の俳優養成と聞くと、チェン・カイコ監督の名作映画『霸王別姫』さらばわが愛』で描かれる、子供が身売り同然に師匠に弟子入りさせられ、体罰などを含めた厳しい修行に明け暮れる姿を想像してしまふ。実際、中華民国期ごろまでの秦腔の俳優教育は、京劇に起源を持つ、「科班」という複数の師匠と弟子から構成された徒弟教育組織で行われており、彼らの間には契約書に基づいた厳格な師弟関係が結ばれていた。入学した弟子には、同期生の間で統一された一文字の入った芸名が付けられ、口伝と体罰による稽古が一般的であつたという。

稽古が一般的であつたという。通常、伝統芸能の演者教育としては、このような徒弟制によるものが想起されると思うが、本書は省立の芸術学校などといった学校を舞台として展開される。私も著者から教わる

五 本書の構成

- 第一章 陝西省西安市と秦腔
- 一 調査地について
- 二 秦腔とは
- 三 秦腔の芸能的特徴
- 四 秦腔と民俗文化
- 五 秦腔の現状
- 第二章 俳優教育の歩みと調査の概要
- 一 秦腔の俳優教育の歴史的背景
- 二 新中国の演劇学校に関する研究
- 三 調査の概要
- 第三章 稽古現場からみた俳優教育
- 一 芸の教授・学習過程への視点
- 二 演劇学校について
- 三 俳優教育の特徴
- 四 稽古現場の概要——ある日の稽古
- 五 身体構築過程としての稽古——段階的な身体作り
- 六 教育目標としての「個性」——芝居の稽古の基本目標
- 七 教育方法としての口伝——その重要性と位置づけ
- 八 学習資源としての「銅鑼・大鼓」言語——稽古に介在する言語実践
- 九 稽古現場における師弟関係——芝居の教師の特徴

までは知らなかったが、現代中国の伝統演劇における俳優は学校を出身とする者が多い。科班が学校に取って代わられるようになったのは中華人民共和国の建国前後というが、その発端となったのは、日本を含めた八カ国の列強による侵略を發端とした「演劇改良運動」(伝統演劇に民衆を啓蒙する役割を求めた愛国主義運動)であり、政治意識の高い知識人によって設立された劇団の付属科班であつたという。

著者は、秦腔教育の最高学府とされる、陝西省芸術学校に教育実習生として受け入れられ、臨時副担任という立場で二年間(二〇〇〇年九月～二〇〇二年九月)の参与観察とインタビューを実施している。それだけでなく、秦腔関連の基本的能力の習得にも挑戦し、学友側の視点にも近づくことを試みている。そのようなフィールドワークに基づいて編まれた本書は序論と結論に挟まれた五つの章から構成されている。その目次は次のようになる。

- まえがき
- 序論 秦腔と芸能教育の学校化
- 一 はじめに
 - 二 本書の問題関心
 - 三 従来の芸能研究の視点
 - 四 本書のめざすもの

まとめ

第四章 組織的文脈における俳優教育

- 一 徒弟教育とは
- 二 演劇学校の組織構造
- 三 入学の過程——人材選別の始まり
- 四 役柄選別と役柄修業——役柄が決まる仕組み
- 五 身体条件や能力に応じた教育的配慮(因材施教)
- 六 定期試験——その三つの側面
- 七 教授法の変容——芸能教育の近代化の一面
- 八 卒業の過程——プロの役者への道

まとめ

第五章 芸能教育の学校化を考察する

- 一 学校化とは
- 二 芸能教育の学校化とは——秦腔の事例からみるもの
- 三 秦腔の俳優教育の今後——芸能教育の学校化の行く末
- 四 学校化のもたらす問題——教育効果をめぐる複数の解
- 釈
- 五 秦腔の俳優教育のその後
- 六 学校化の比較考察
- まとめ
- 結論
- あとがき

内容について概観すると次のようになる。本書ではまず序

論で、人類学的演劇研究、民俗芸能研究、芸の教授・学習研究という三つの分野から先行研究を整理した上で、その目的を明示する。第一章では調査地域である西安の概要を示し、研究対象となる秦腔の特徴を芸能的特徴や民俗文化とも関連付けながら紹介している。第二章では、秦腔における俳優教育の歴史的發展と調査の概要を記している。

続く、第三・四章が演劇学校を舞台としたエスノグラフィックな記述・分析となる。第三章で演劇学校における芸の教授・学習過程が、稽古現場というミクロな次元において、とくに「稽古の過程」、「教育目標」、「教育方法」、「学習資源」、「師弟関係」という五つの側面から描き出される。第四章では、演劇学校というより広い組織的文脈における俳優教育の在り方が示される。ここでは、演劇学校における「入学の過程」や「定期試験の諸相」、「卒業の過程」といった、徒弟教育とは明確に異なる、学校化された俳優教育の特徴が明らかになる。これらのエスノグラフィックな記述を受け、第五

章において、著者による二年間に及ぶ長期フィールドワークの成果をまざまざと見せつけてくれる。同じ学内であっても、卒業後の就職先が固定されていない学級があったり、蘭州や寧夏、新疆といった各地の劇団と契約を交わして人材育成を行っている学級があったりとバリエーションに富んでおり、俳優教育の多様なあり方を見ることができるといえる。

これらのデータからは、学校教育のなかで伝承される伝統芸能の意外な一面も見出すことができる。そのひとつには、国語や数学(代教)、政治、歴史英語といった一般教養科目が、役者の素質を高めるためのものとして、決しておざなりにされずに扱われている。後述する、中国の伝統演劇を取り巻く政治環境とも関係があるとも考えられるが、秦腔の習得に直接的には関係がない一般教養科目が重視されていることが驚きであった。一方で、学校であれば当然設けられる、夏休みなどの長期休みが多いことにより、十分な稽古時間確保できないという批判にさらされているというのも興味深い。惜しむらくは、もう少し、教える側の人々についてのエスノグラフィックな記述があってもよかつたのではないかと思う。第三章で男子生徒のある一日が順序立てて紹介され、学校における生徒の生活については具体的な記述がなされる。それ以外にも、入学試験をめぐる記述において、生徒たちの

章において、芸能教育の学校化がもたらした教育効果や社会的評価さらには今後の展開についても検討される。最後に、結論において、本書を通じた全体のまとめを行っている。

本書の舞台となる陝西省芸術学校は、陝西省の現存する演劇学校の中ではとりわけ古い歴史をもつという。その前身は、一九五七年六月に西安で設立された陝西省戯曲学校で、徒弟教育時代の封建的な旧習を払拭した社会主義的な演劇学校として設立されている。当初は秦腔や京劇などの役者を養成する、高い教育水準を誇る伝統演劇の専門学校であったが、文化大革命で完全閉鎖となった後、他の専攻も置く総合芸術学校へと変化した。これは、伝統演劇がかつてほど注目されなくなった結果、秦腔を学ぶ生徒が減少し、学生不足から演劇学校としての経営が難しくなつたためとされる。現在では、陝西職業芸術学校として、伝統演劇、舞踊、映画、音楽、美術といった専攻が設置されている。このような学校の変遷からも、現代中国における伝統演劇の位置づけの変化がうかがえる。

本書の中核となるデータは、いずれも学校での稽古現場をはじめとする、日常的な場面から得られたものが中心となっている。秦腔演劇専攻コースに在籍する生徒たちが、五年間という在校期間においてどのような教育を受け、一人前の俳優者となるべくどのように成長していくかが丁寧に描かれて

入学の動機や背景が明らかになっている。一方で、教える側の教師については、生徒たちとの関わりにおいて断片的な記述はなされるものの、調査当時、彼らがどのような生活を送っていたかが分かる記述は少ない。追跡調査を実施した際(二〇一〇年三月)には、多くの教師がビデオカメラを所有し、芝居の稽古のときなどに使用していたとあるが、教師の収入がどのくらいのもので、数年の間にもどのように変化したかが分かっていたら、より理解しやすかつたのではないだろうか。本書の特色の一つには、メインフィールドである省立学校以外にも、民営の演劇学校など異なる環境にある学校をもつフィールドとして調査を行い、伝統的な徒弟制から近代的な演劇学校への進化という、一元的な発展史観に異を唱え、多様な変遷のあり方を描き出しているところにある。ただし、いずれの事例においても徒弟制の封建的色彩が図られているのは、新中国成立後の演劇改革や人民教化に努めるプロパガンダ芸術としての位置付けなど、独特の政治環境が影響している」と結論付ける。このような分析は、中国社会を研究対象としていた私にとっても、中国社会の近代化の一つのあり方を示すものとして、たいへん興味深いものであった。ただ、本書が中国社会における特定事例の研究にとどまらず、より幅広く、伝統芸能における教育の研究として成り立っているのは、広範で周到な先行研究と理論の整理によるも

のである。先に挙げたように、本書の序論では、人類学的演劇研究だけでなく、民俗芸能研究、さらには芸の教授・学習研究についての整理と検討がなされている。さらには、エングラフィクな記述とそれに基づいた分析が行われる中でも、随所で日本の伝統芸能や民俗芸能、さらには学校化した芸能教育の事例として、宝塚音楽学校やイギリスのバリエ学校などとの比較が試みられる。

日本の、特に民俗芸能の分野においては、本書で取り上げられるような国家の制度に位置づけられ学校化されたような事例は寡聞にして知らない。ただ、後継者育成や普及啓発のための試みとして、学校の課外活動において民俗芸能教育に取り組んでいる事例は存在する。本書は、このような事例の現場

における教育のあり方が、本来の教育方法とどのように異な

ってきているかを分析するための参考になるのではないだろうか。

最後に、ごく私的な感想を一つだけ付け加えさせていただく。文中に登場するインタビューの中には、著者の紹介を通して私もお世話になった、懐かしい名前が見える。最近では、Zoomなどといったインターネットを介したコミュニケーションが盛達しており、日本にいなながらも、即時的なコミュニケーションが可能であるが、やはり現地を訪れて実際に顔を含わせてみたいくなる。一刻も早くコロナ禍が収束し、再びお目にかかれる日が来ることを願っている。